

ファン・ルーラーの予定論

ポール・R. フリーズ

関口 康訳

これらすべてにおいて、神の予定と人間の意識は、根本的に重要な位置を占めている。その二者の交差点に人間性(humanitas)が生まれ出される。予定の教理は、神の存在よりも、神の計画を指し示す。すべての必要論〔世界は神にとって必要なものであるという教説〕と運命論から世界を守る¹。神は、永遠の計画において、救いのみをお求めになったのではなく、世界そのものをお求めになった。こうして、予定によって、永遠の計画から永遠の御国に至るまで、歴史は満たされるのである²。始原(proton)の展開と贖いは、墮落と罪ゆえに呼び出された。こうして、予定論的な歴史の満たしにおいて、神の意志は神の選びによって存在とふれあう。神は人間をお選びになり、その人間をご自身の傍らに置き、人間を通して働いてくださる³。ここで、神のみわざと人間のわざとの比較という問題が浮上する。ファン・ルーラーは、「歴史とは、そのすべてが神のみわざである。しかし、そのすべては人間のわざである」⁴と語ることができた。神の意志と存在とがふれあうとき、人間存在は神のみわざに参加する。しかも、その人間存在は、操り人形としてではなく、人間として参加する。これが意味していることは、選びが包み持っているのは「心」(heart)以上である、ということである。選びは人類を、国民を、そして文化をも同じように包含しているのである。人間の参加についてこのように語られることはすべて、地上の存在とその救いは予定の種が結ぶ果実を表わしているということの意味する。こうして、ファン・ルーラーの予定論は、彼の聖霊論へと直接的に向けられている。またその状況をキリスト教的実存という視座から見ると、救いの諸現実には恩恵の手段同様、それ自体を越えて、神の計画と聖定とに向けられている。まさしくこれが、改革派神秘主義の真の実現である⁵。予定において、神秘主義と宗教が、共に手を携えるのである⁶。

¹ Kersteing, pp. 29-32; Theologisch werk, 1:161.

² Reformatorische opmerkingen, p. 83.

³ Ibid., 90-91.

⁴ Theologisch werk, 6:54.

⁵ Ibid., 3:89-90.

⁶ Ibid., 6:110.

改革派神秘主義を觀照することにおいて、意識に内容が与えられる。改革派体験主義のキリスト教は、神の「他者性」(strangeness)の教理に立っている。神はわれわれの外に、上に、そして向かい合ってお立ちになる。改革派神秘主義は、キリスト教神秘主義の他の諸形態とは異なり、神と人間の魂の内的本質との間に一致は無いと考える。回心と再生によって、神の人間からの疎外が克服されなければならないのである。そしてこれは、神の恵みのみわざとして起こる。神秘主義の意味での神の「所有」(possession)の場合、内なる神性を見出すことではなく、予定する真の神のご計画を適用することを意味する。そして、これは、救済論的枠組みにおいて起こることである。ところが、このことは、恩恵の手段から離れて起こることではないし、また、自然的神認識〔自然神学〕が改革派神秘主義に、目指すべき方向を提供しているわけでもない。その神秘主義は神ご自身に方向づけられているのである⁷。その神秘主義は、彼を越えて立ち、また彼の差し向かいに立っておられる神のもろもろの目的の光において「ここで、今」(hic et nunc)の生を觀照するのである。しかし、彼は、觀照における再生によって、「自分自身のもの」になる。地上の存在は、神の計画と神の国との視座において見られるべきものなのである。

ここに真の自由が見出される。また、ここに根本的な「生活感覚」が打ち立てられる。大いなるものは愛である。しかし、キリスト者の生活感覚にとって、もっと大いなるものは喜びである、とファン・ルーラーは主張する。彼は、予定したもう神を喜びとするのである。彼は、自分自身の意識において、選びも遺棄もなさる神のご意志についての自覚を与えられ、それは善きことであると肯定するのである⁸。

こうしてファン・ルーラーは、神の予定と人間の良心との相関関係について語ることができた⁹。キリスト者は、彼の意識の中で、万事を把握しうる。たとえそれが神との永遠のご計画であっても。神のすべてのみわざは、人間の意識の内に反映される¹⁰。ところが、ここで問題となるのは、神の意志が善きものであることについて、消極的肯定以上のことが言われていることである。キリスト者は、神の意志を觀照し、かつ肯定するだけでなく、彼はまた、神と共に考え、神と共に裁き、神と共に意志する。そしてこのようにして、彼は、神のみわざを行うのである。ファン・ルーラーに言わせるなら、神があることを為

⁷ Ibid., 3:83, 88-90.

⁸ Ibid., 3:83-84; 89.

⁹ Ibid., 3:89. ここに持ち出した「良心」(conscience)という語は、道徳的な感覚(sense)と意識(consciousness)との両者を含んでいる。

¹⁰ Ibid., 6:11.

し、人間があることを為す、というわけではない。むしろ、神が100%行い、われわれが100%行うのである¹¹。神と人間との相互関係は、予定と意識とが収斂するところに生まれるのである。そして、この相互関係が真の人間性を生むのである。

(ポール・フリーズ著『真の人間存在にとっての宗教とその希望』156～157ページより)

¹¹ Ibid., 3:54.